

「衒示的消費」の100年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): Consumption, Institution, Evolutionary Economics, Veblen, Institutional Economics, Conspicuous Consumption 作成者: 内田, 成 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/897

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「衒示的消費」の100年

Veblen's Theory of Conspicuous Consumption after 100 Years

内 田 成

UCHIDA, Minoru

1. はじめに

制度派経済学の創始者であり、制度学派の建設者のひとりとしても知られているソース・タイン・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929)⁽¹⁾の「衒示的消費」(conspicuous consumption)⁽²⁾はヴェブレンとすぐに結びつけられる用語であるといっても過言ではあるまい。それは、彼の処女作であり最も有名な著作『有閑階級の理論』で最も詳細に理論化されている。

ヴェブレンは、この著作の中で「衒示的消費」「衒示的閑暇」「金銭の見栄」といった制度化された行動様式について斬新な洞察を行ない、それは幅広い人々の関心を掻き立てた。さらにヴェブレンは差別的な象徴として資力を利用する制度的あるいは儀式的な消費と道具的な消費とを明確に区別している。そして、このような二分法は彼の経済体系を貫く基本的な原理である。⁽³⁾ここで採りあげる「衒示的消費」によって特徴づけられる消費論は、その制度理論の一つの表現形態であり、制度理論はヴェブレンの思想全体を貫く柱である。特にヴェブレンの消費概念は経済学における消費行動について体系的な解明を与える最も

初期のものの一つ、といわれている。⁽⁴⁾

ヴェブレンの理論によれば、直接的に消費される商品やサービスの主たる効用は結果として生活や福祉を強化する、と考えられた。これに対して衒示的消費あるいは主として副次的な効用により動機づけられた商品やサービスの消費は、有閑階級に限定されるだけでなく、最も富裕な人々から最も貧困な人々までのあらゆる社会階級や所得階級にまで及んでいる。あまり富裕ではない階級の人々はより富裕な人々の消費パターンを模倣する。したがって、副次的効用は主たる効用に比べて弱いのではなくて、人々の消費行動に大きな影響を及ぼす、と考えられる。⁽⁵⁾

そこで、以上のような視点から『有閑階級の理論』の理論で展開された「衒示的消費」の考え方がその後どのような評価を経て現在至ったかをスチーブン・エジェルの論文「100年後のヴェブレンの「衒示的消費」理論」を採り上げ検討することにより明らかにしよう、と考えた。⁽⁶⁾というのも、この論文におけるエジェルの目的がヴェブレンの「衒示的消費」を特に経済学者および社会学者によるこの一世紀にわたる解釈や研究に照らしてその適切や歴史的妥当性を再評価することにあるから

キーワード：消費、制度、進化論的経済学、ヴェブレン、制度派経済学、衒示的消費

Key words : Consumption, Institution, Evolutionary Economics, Veblen, Institutional Economics, Conspicuous Consumption

であり、それは現代における「衛示的消費」の妥当性の評価にもつながると考えたからである。つまり、「衛示的消費」は決して過去のものではなく、むしろ現代における消費者の行動を説明するための有効な考え方のひとつであり続けていることへの傍証となる、と考えた。

2. ヴェブレンの基本的な考え方と「衛示的消費」理論

ヴェブレンは1899年に『有閑階級の理論』⁽⁷⁾を出版したが、この著作は現在でも依然として出版されている。その中核的な概念である「衛示的消費」はヴェブレンの名前と最も容易に結びつけられるし、しばしばヴェブレンあるいは『有閑階級の理論』の理論に言及することなしに、社会科学、人文科学および一般的な会話に頻繁に現われている。⁽⁸⁾

エジェルによれば、「衛示的消費」の考え方は『有閑階級の理論』発表の数年前にヴェブレンが発表した経済成長、競争的な見せびらかしや社会的不安に関する論文の中に暗示されており、別の初期の論文の中で人間の衣服の消費に対してヴェブレンは「衛示的消費」という用語を最初に使った。「アメリカ社会学雑誌」に発表された三部作の論文の中でヴェブレンは、有用だが退屈な活動（workmanship）と浪費的だが名誉のある活動（predation）との間の起源および歴史的な緊張（tension）に関するその考え方、つまりその進化論的な社会変化理論とその特殊な「衛示的消費」理論の双方を特徴づけている二分法を概説している。これらの論文の最後のもの「野蛮時代における女性の地位」を発表した1899年の後半に、消費の社会学に対する長い貢献で有名なヴェブレンの著作である『有閑

階級の理論』が出版された。⁽⁹⁾

そしてエジェルによれば、ヴェブレンの「衛示的消費」理論の広範囲にわたる社会科学的な文脈は、ヴェブレンが多くのその他の論文で攻撃した主流派経済学の快楽主義的な仮定への返答であった、ということである。より具体的にいえば、ヴェブレンは静的な人間性の概念に基づいたいかなる経済分析にも批判的であったし、特に制度的な諸要素を除外し孤立した個人主義的で合理的な計算に焦点を合わせた人間性の概念に批判的であった。ヴェブレンにとって、本質的にそのような受動的な人間性の概念は「人間性の発展理論に素材を与えない」し、それゆえに社会的な変化を説明することができない、と考えられた。この見方のもっている重要な含意はヴェブレンの生涯にわたり認識されてきたし、過去半世紀にわたり広く議論されてきている。つまり、ヴェブレンは「衛示的消費」を変則的な経済的活動としてではなく、通常のものと同様とした。それはあらゆる経済活動が文化的な真空状態において生ずることのないのと同様である。「衛示的消費」理論は経済理論の本質に関する19世紀後半の議論にその起源を持つが、「因襲的な経済学の消費（需要）理論に認められている快楽主義者の侵略に対する現実的（positive）な選択肢」を象徴している、といえる。⁽¹⁰⁾

ここで非常に重要な指摘がなされている。まず、第一に「衛示的消費」論が因襲的な経済学の受動的な快楽主義的な人間観に対する批判である、という点である。よく知られているようにヴェブレンは独自の本能論に基づく能動的な人間観に持ち、人間の所与の環境への適応過程において形成される制度を重視した。さらに第二にいわゆる彼独自の「進化

論的経済学」(制度派経済学)を作り上げる際に因襲的な経済学の批判的な吟味を行なった。そして第三に「衞示的消費」が変則的で特殊な現象ではない、という点である。⁽¹¹⁾

次にエジェルはヴェブレンの「衞示的消費」が独創的なものであることを認めつつも、その形成にあたり影響を与えたと考えられる特に二つのものについて、すなわちジョン・レー (John Rae, 1796-1872) とフランツ・ボアス (Franz Boas, 1858-1942) について次のように述べている。まずレーとの関係についてこう述べている。⁽¹²⁾

「衞示的消費」という表現法はヴェブレンによって造りだされ、理論化され、広められたが、そうする際に彼がレーの著作に負っていることは明らかである。高価で、稀少で、非常に人目につく商品は功利主義的な目的よりもむしろ社会的な目的で獲得される、という観念を含んでいる「衞示的消費」についてのヴェブレンとレーそれぞれの説明には多くの類似点がある、という。⁽¹³⁾

さらにボアスとの関係については、ヴェブレンの理論あるいは「衞示的消費」の第二の主要な知的な前例は、ボアスによって立証されたポトラッチと名づけた儀式的な形態に関連している。ヴェブレンはボアスあるいはクワキントルインディアンを十分に知っていた。それはシカゴ大学で「文明における経済的諸要因」とタイトルの講座1899年にシカゴで行なったが、その中で「ポトラッチあるいは大舞踏会は…差別的な目的に役立つ」ということを述べている。ボアスとヴェブレンの関連は記されてはいるけれども、ヴェブレンがボアスに負っていたことの十分な説明はまだ公にされてはいない。⁽¹⁴⁾

明らかなことは、ヴェブレンが1890年代を

通じて「衞示的消費」の観念を考え抜いており、1895-96年というアカデミックな時代に『有閑階級の理論』を書き始め、そして「衞示的消費」の社会的および競争的な側面を彼独自の理論に統合した、ということである。⁽¹⁵⁾

次にエジェルによれば、最も初期の社会以外のあらゆる社会において、「製作」あるいは「有用性」、従って物的な生活を強化するものを含むものと「略奪」あるいは「搾取」、従って社会的な評判を強化するものとの二つのタイプに経済活動を分類することができ、これら二つの経済活動の間の比較は経済的特化の程度に応じて様々な社会において変化する、としてヴェブレンの「衞示的消費」理論の特徴を以下のように要約している。⁽¹⁶⁾

1. この二分法が財やサービスの生産に当てはめられた場合、労働の二つの類型が区別される。(a)主として機械過程に関連する産業的職業と(b)主として金銭的な価値に関連する非産業的な職業である。そしてこれが消費に適用された場合、商品の二つの類型が区別される。すなわち、(a)人間の生活の維持に不可欠な商品と(b)社会的名声の維持に不可欠な浪費的商品である。
2. 製作が支配的な社会では、見栄は産業的な種類の性質を持っており、きわめて顕著ではない。略奪が支配的な場合、見栄は金銭的でありはるかにいっそう顕著である。
3. 社会の経済的進化の初期の段階においては、有用な活動と浪費的な活動という見地から、生産と消費との区別は性的な方向に従っている。女性是有用な活動において支配的であり、男性は略奪的な活動において支配的である。その後の段階では、生産活動と消費活動との間の区別は、また階級という方向に沿って発達する。下層階級は有

用な活動に特化し、上層階級は浪費的な活動に特化する。

4. 経済的に豊かな社会においては、経済的に生存するための闘争は、かなりの程度まで社会的な地位に対する高度な競争に変形されてくる。
5. 近代社会において社会的な地位を示す主要な方法は金銭的であり、直接的にあるいは代行的な財やサービスの「衒示的消費」という形態を帯びる。
6. 「衒示的消費」に寄与する3つの主要な要因が存在する。(a)生産的な仕事を控えることあるいは衒示的閑暇、(b)費用あるいは衒示的支出、および(c)資源の浪費あるいは衒示的浪費。要約すれば、時間、金銭および資源の「衒示的消費」である。
7. 衒示的に消費することへの文化的ニーズは、特に略奪的な野蛮時代（たとえば封建的ヨーロッパ）より初期の社会の上層階級の間に起源があり、都市化された近代社会のすべての階級に広がった。

エジェルの、ここで、ヴェブレンの「衒示的消費」理論について2つの点に要約し次のように述べている。

まず、第一にヴェブレンが人間の生存にとって、それゆえにその社会の集団的な利害において根本的であると考えた製作の価値および制度への選好は財産と関連した略奪的な価値および制度や寄生性があると考えられた愛国的行為に対してよりも、公益に対して有害である。事実、「生活や文化に対するばかばかしい制度の勝利」に関するヴェブレンの恐怖は近代資本主義および民族国家の双方に対する倫理的な正当性の否定である。

第二に、彼の理論の政治的目的は、「古代の傾向の保護」と見栄のプロセスによって、被

支配階級が前近代時代に起源をもつ有閑階級の略奪的な価値観に順応する傾向がある。

ヴェブレンの「衒示的消費」理論は近代資本主義の「社会的安定性」を説明する。⁽¹⁷⁾

3. ヴェブレンの「衒示的消費」理論：批判的な意義

ヴェブレンの理論あるいは「衒示的消費」の批判は経済から歴史、政治から社会学まで及んでいるが、エジェルの論及点は主として経済学と社会学にある。というもののヴェブレンへの批判は、主にこれらの分野にあると考えられるからである。『有閑階級の理論』の出版への当初の反応は「衒示的消費」理論に焦点を合わせたものではなかったが、その急進性と皮肉に一層多くの関心を引きつけた。特に初期の批評家たちは制度あるいは私有財産および宗教に対する攻撃と見做し、道徳的に立腹していたように思われる。これらの初期の異議のある批評家たちの関心は『有閑階級の理論』の中核にある「衒示的消費」理論の長所に関しては無視をするという型を示しているように思われる。このような批判は消費および階級に焦点を合わせた典型的な中流都市の再検討において『有閑階級の理論』に対して与えられた評価にもかかわらず1950年代まで続いた。ヴェブレンの「衒示的消費」理論が批判的な関心を引きつけ続けたのは1950年代の大衆消費社会まではなかった。⁽¹⁸⁾

ヴェブレンの「衒示的消費」理論に対する異議の中には、それが書かれた時代に限定される歴史的な妥当性を持っていた、というものがあつたし、1950年代までに、それは時代によってその地位を譲ってしまった、「時代遅れ」となった、というものがあつた。リースマンやミルズの主張がその代表的なもので

ある。⁽¹⁹⁾

また主流派経済学からのアプローチもあった。たとえば、1950年代初頭からライベンシュタイン⁽²⁰⁾をはじめとし、経済学者はヴェブレンの概念あるいは「衞示的消費」を因襲的な「消費者需要の静的分析」に取り入れようとした。そしてヴェブレンが消費へのその他の外的な非経済的な影響を見逃している、ということを示した。これは「衞示的消費」を価格効果として定義し、「非機能的な」需要、「バンドワゴン」および「スノップ」効果という二つの異なったタイプから区別することで成し遂げられた。こうして現代の主流派経済学の教科書ではヴェブレンの「衞示的消費」理論は例外的需要という表題のもとに組み入れられがちである。

新マルクス主義経済学者はヴェブレンに一層マクロ経済的な視点からアプローチしがちであったけれども、彼らはヴェブレンの「衞示的消費」の説明が不完全であったということを示唆しがちであった。つまりヴェブレンが「衞示的消費」の発展の説明において資本蓄積に不十分な関心しか払っていない、ということであった。このことに対する主要な根拠は、ヴェブレンの「衞示的消費」理論が「プチ・ブル」の浪費性に焦点を合わせ、正確さを欠いている、ということである。それゆえに、ヴェブレンの分析は「名声のための競争的な努力ではなく」資本蓄積する必要が歴史における主要な経済的力である、ということを見ることから彼を妨げていた、ということになる。ティルマンはヴェブレンについてのこの批判がアドルノ (Theodor Adorno, 1903-1969) を思い出させると記している。⁽²¹⁾

エジェルのよれば1950年代のヴェブレンの「衞示的消費」理論についての評価は、大部分

が肯定的な言及で、しかも増加しつつあるし、批判がなされている場合でも、徹底的にというよりもむしろついに行なわれる傾向があった。

しかしながら1980年代および1990年代はヴェブレンの「衞示的消費」理論へ批判的興味のリバイバルが見られた。メイソンは「衞示的消費」の研究を主流派経済学の立場から吟味した。ヴェブレンのモデルが例外的な消費者行動というこの広く行きわたった形態に対するいまだに最も有用なものである、という評価をするけれども、「過去50年以上の衞示的消費についての研究は、その欠如によってのみ注目に値するし、経済学者はそのような思い通りにならない需要のよりよい理解に殆ど全く貢献してこなかった」ということである。⁽²²⁾

エジェルは過去100年に現われたヴェブレンの「衞示的消費」理論についての詳細な批判としてキャンベルを採りあげている。⁽²³⁾ キャンベルはヴェブレンの消費についての社会科学的な理解の重要性を認めているが、彼の「衞示的消費」理論は明快ではないと論じ、『有閑階級の理論』における「衞示的消費」の定式化を行なっている。

- (1)「説明的」あるいは主観的定式化：それは「衞示的消費」を一定の明確な心理的な状態の存在によって特徴づけられる活動と考える。
- (2)「衞示的消費」が特定の目的－成果あるいは結果によって特徴づけられる行動の一形態と見做す結果論者的あるいは「機能的定式化」
- (3)「衞示的消費」を一定の「固有の」資質によって特徴づけられる行為の一形態と定義する本質的概念

キャンベルによれば、第一の定式化は曖昧である。というのも、極めて重要な定義の基準が意思あるいは動機のいずれであるか、またその場合複数の候補のうちのどちらが選ばれるべきかが明確ではないからである。また、これらの規準が「意識的、潜在意識的、あるいは単に習慣的な慣行に具現化されたものとして見るべき」かどうか、ということもまた明確ではない。第二の公式化は問題をはらんでいる。というのも、「それは、そのような意志によって特徴づけられるけれども、その目的を達成しない行為を大抵除外する」し、さらに「この結果によって特徴づけられるけれども、いかなるそのような意志によって促進されることがない行為を含んでいる」からである。その上、このアプローチは「同一の目的を達成するその他の手段を認めない」(すなわち、機能的な選択肢を認めない)。第三の「本質的な概念」は問題をはらんでいると思われる。というのも、消費の浪費性あるいは見せびらかしは必然的に非常に文脈的であり、どのような場合でも地位と重なり合う支出と仮定することはできない」。(24)

キャンベルはヴェブレンの「衛示的消費」理論のこれらすべての困難さが打破できて、吟味しうる一組の命題が現われてとしても、経験的な研究に最終的な障害物、すなわち人々は「衛示的消費」に従事することを認めることに不承不承である、というメイソンの指摘、が残る、と結論づける。

キャンベルのヴェブレンの「衛示的消費」理論についての批判は、「科学的社会学」の視点からなされた初期の異議のあるコメントの多くを反映しているし、それは独創的な概念化に固有な明快さの欠如に向けられている。(25)

4. ヴェブレンの「衛示的消費」理論: 批判的評価

次にエッセルは社会学の領域におけるこれまでの評価について述べている。それによれば、「衛示的消費」理論を含むヴェブレンの『有閑階級の理論』の最初の明白な社会的な支持は、E.A. ロスとレスター・F・ウォードによって表明された。ウォードは『有閑階級の理論』が「非常に多くの真理を含んでいる」と考えた。またロスはヴェブレンの社会理論および社会批判によって明らかに影響を受けていた。しかしロスとウォードだけが賞賛したわけではない。多くの社会学者や文学者でさえヴェブレンの『有閑階級の理論』の透徹した洞察力やスタイルおよび特に彼の「衛示的消費」理論ヴェブレンに関して好意的なコメントを寄せたが、彼の貢献は階級に関するロスの著作においてもっとも顕著であり、経済学や社会学の教科書での認知にも影響を与えてきた。

1930年代後半においてはヴェブレンの「衛示的消費」理論が経験的なデータにより説明され、それによりその有効性が証明された。典型的な中流都市の最初の研究は競争的な見栄の消費を描写したが、さらに進められた再検討は、その社会の文化的水準にはめ込まれた上流階級の役割に関するヴェブレンのテーゼだけでなく、消費者行動を理解するための「衛示的消費」および毎年新車を購入するパターンはヴェブレンの浪費の分析の適切さを証明した。

ヴェブレンは、その世代の階級の「主要な」アメリカ社会学者として賞賛された。経験的な社会調査におけるヴェブレンの「衛示的消費」理論の価値は、さらにバーナーとレント

により証明された。彼らは家、車およびスポーツへの彼らの富の相対的に高い支出に関して確立された上流階級と比較してヤンキーシティのニューリッチの傾向を明らかにした。⁽²⁶⁾

さらにエージェルによれば、イギリスではヴェブレンの「衛示的消費」理論は「出発点」であったし、ファッションの歴史的説明においてベルにより進められた「すべての議論」を啓発した。ベルはヴェブレンの「衛示的消費」理論以外の第二次世界大戦以前のすべてのアパレル理論を拒絶した。ベルはヴェブレンの「衛示的消費」消費の3つの要素（衛示的費用、衛示的閑暇および衛示的浪費）を過去と現在の比較の例証で裏づけている。そして第4のカテゴリー衛示的無礼を付け加えている。それを彼は「ある種の攻撃的な非適合性」と定義している。⁽²⁷⁾

合衆国では1940年代後半にマートンが明示機能と潜在機能の区別を展開し、ヴェブレンの「衛示的消費」の分析を「暗示的に潜在機能の観念を使っている研究の一例」として引用した。消費が有用な考慮と地位の考慮の双方を含むというヴェブレンのテーゼはマートンによって、それぞれ明示機能と潜在機能と書き直された。ヴェブレンは社会学的分析様式に対する主要な貢献であるとマートンにより功績を帰せられた。⁽²⁸⁾ ヴェブレンの競争的消費理論はパッカードのアメリカ消費文化へのベストセラーの批判書によって1950年の終わりに一般的な表現となった。⁽²⁹⁾ また、大学の内外でもヴェブレンの「衛示的消費」理論は1950年代においてアメリカが一層近づきつつあった豊かな社会において反響があった。⁽³⁰⁾

カールトンカレッジでの100周年を祝う

1966年のヴェブレンセミナーは「衛示的消費」理論に焦点を合わせていなかったが、この点は1970年代においてコーサーとディギンズによって補正された。彼らはヴェブレンの観念、特に「衛示的消費」理論の普及に貢献した。⁽³¹⁾

1980年代においてヴェブレンの「衛示的消費」理論の広範囲におよぶ普及はブルックスによって引き起こされた。この理論の新しく拡張された型はタイム誌にレビューされている。『有閑階級の理論』同様ベルを引用しながら彼は、「衛示的消費」は未だに広く受け容れられているけれども、競争的消費はより複雑になってきたし、そこにはいまや模倣の要素も含まれている、という。⁽³²⁾

ヴェブレンの「衛示的消費」論の継続的な妥当性の証拠を低開発社会や先進社会において調査することはマンスフィールドやマクドナルドらによってもたらされている。結局、ヴェブレンの「衛示的消費」理論は教育の消費、ギフトの交換およびアメリカにおける文化的な批判史を含む学究的な文脈に広範な領域において未だに引用されている。さらにヴェブレンの『有閑階級の理論』は教科書において「消費に関する（社会学的）文献に対する最初の主要な貢献」として知られ続けている、という。⁽³³⁾

そしてエージェルは結論として次のように述べている。特に社会学および経済学を中心としたヴェブレンの「衛示的消費」についての100年間の概略的な検討は、社会科学的妥当性と歴史的適切さという評価のふたつの主要な領域を明らかにした。

ヴェブレンの「衛示的消費」理論が、その操作主義化を妨げ、それゆえに検証する研究におけるその使用を妨げる曖昧な方法で公式化される、という議論には二つの方法で応え

ることができよう。

第一に「衞示的消費」に関する経験的な研究がヴェブレンのオリジナルな概念化の永続的な有効性を証明する多くの社会学者によって行なわれている。

第二にヴェブレンは「衞示的消費」理論を科学的社会学の興亡以前に唱えた。それは1930年代以降アメリカにおいて特に支配的になった形態あるいは社会学であり、反実証主義者の批判に非常にうまく抵抗してきた。それゆえに、ヴェブレンの最も有名な理論をまだ発展していなかった社会学の概念の方法論的な規定に一致していないから信頼できない理由で退けてしまうのは疑いもなく不適切である。⁽³⁴⁾

エジェルは過去百年にわたり出現してきた批判的な評価の関連した方向は、ヴェブレンの「衞示的消費」理論の歴史的な適切さに関して、である。「衞示的消費」を認定するという方法論的な問題を別として、彼の理論は、たとえ19世紀後半のニューリッチに適用されたとしても、もはや妥当性がない、ということが主張されてきた。というのも、物的な豊かさの出現が同時にその重要性を減少させ、消費の複雑さを増大させたからである。にもかかわらず、「衞示的消費」の個人的ならびに集団的形態の双方に関して、それとは反対のかなりの証拠も存在するように思われる。事実、「衞示的消費」の継続的な普及は進行中の議論に対する主要な貢献者によって立証されている、という。

エジェルはヴェブレンの「衞示的消費」理論には、その公式化のために否定できない曖昧なその他の問題があるにもかかわらず、肯定的に答えるための強力な根拠として次の4つをあげている。まず、第一にもしもヴェブ

レンが彼の書いた独自の用語やその時代によって判断されるならば、社会科学を構成するものに関する彼の観念は、経済活動の現存する歴史的静的な概念を拒絶しており、これは彼の「衞示的消費」理論で彼が「何を貨幣で購入するのかについての社会的な意味に対してわれわれに警告し、それによって消費の経済的使用を変えている」という重要な意味を知らせている。換言すれば、単なる金融をはるかに超える社会的ならびに文化的な重要性を持っている消費は、20世紀後半においては親しみやすい観念になるかもしれないが、100年前には、それは主流派経済学を破壊するような激しさをもった考察であったし、消費の社会学の成長の基礎となった。

第二に、これを達成する過程でヴェブレンは、『有閑階級の理論』が事実には照らして理論を吟味することによって、知識を増大させるものよりもむしろ論争的な学問分野としての社会学の支持として読むことができる、という意味で社会科学に対する反保守主義者の攻撃を期待しただけでなく、また独創的で、挑発的で影響力のある方法で、均一的でない階級関係の永続性を解釈した。

第3に経済学者、特に社会学者や歴史学者、また人類学者、地理学者などの多くの学者が、自動車、建物、衣服から休暇までの非常に多様な財の消費を理解するためにヴェブレンの「衞示的消費」理論を利用した。さらに彼の「衞示的消費」理論はその継続的な妥当性を堅固にする方法で発展してきた。

第四に、ヴェブレンの「衞示的消費」理論が先駆的な理論として役立っている社会批判の古典的な社会学的伝統は、選択的理解のための研究において社会的真実についてヴェブレンによって啓示を受けた人々によって生き

続けている。

最後に協調的仮説：ヴェブレンの「衞示的消費」理論内に埋め込まれた社会的地位に対する競争の浪費性および不適切さの批判は、根拠のないものではない。次世紀において、ヴェブレンの主要な遺産は知的ではないが、実践的になる、ということは可能であるし、これは「衞示的消費」理論の創案者を不満足にはさせない、というのがエジェルの結論である。⁽³⁵⁾

5. エジェルの所説の検討および今後の課題

これまでエジェルの所説に即してヴェブレンの「衞示的消費」に関する評価が、この100年間でどのように変化してきたのかを見てきた。エジェルの所説はこれまで見てきたように主に社会学と経済学の領域を対象としているとはいえ非常に多岐にわたり、「衞示的消費」をめぐるさまざまな評価や考え方の変遷を追う上では非常に役立つものと評価できる。また、エジェルの所説は時代的に見るとヴェブレンが『有閑階級の理論』で衞示的消費を明確な形で展開してから彼が亡くなる1929年ごろまで、1950年代および1980年以降という3つの時期を中心に展開されている。ヴェブレンの基本的な視点に関する考察や衞示的消費の特徴の要約など非常に優れた点を挙げることができる。

ヴェブレンの考え方を概説すれば、彼独自の進化論的経済学を作り上げる際に因襲的な経済理論の先入観や前提を批判的に吟味したが、特に人間観を問題とした。というのもヴェブレンは個人が近代資本主義のような特定の経済文化的複合体の構成員である、と見做し、その経済行動を分析した。彼は人間行

動が社会的あるいは文化的な産物であるという認識に基づき、さらに人間は本能に基づいて能動的に行動するものと考えた。しかし、注意しなければならないのは、習慣という要素が本能と人間行動の間に介在するということである。本能は直接的には行動を起こさない。個人は本能により行動するが、その行動の反復は習慣的な反応という形を採る。そして人間の行動は個人が生活している集団から多くの影響を受ける。つまり個人はすでに定着している思考および行動の標準が存在する社会に生まれ、それらの複合体が制度であり、制度の複合体が文化である、と考えられる。したがって、衞示的消費を論ずる場合にも、本能と制度論とを関連づけるこのような視点への論及が不可欠である、と考えられる。しかし、エジェルの所説には、このようなヴェブレンの基本的な方法論との関連に関する掘り下げた検討が見当たらない、消費を制度と言う観点から捉えた点についても不十分な検討が行なわれているに過ぎない。確かに100年に及ぶレビューゆえに総花的なることは避けられないかもしれないが、この点にこそヴェブレンの消費論の独自性があり、それに関する論及は不可欠といっても過言ではあるまい。

『有閑階級の理論』の理論でヴェブレンが展開した独自の消費論を制度論との関連で論及してゆくことは今後の課題としたい。また最近ヴェブレンの本能論について注目すべき研究も現われてきており、⁽³⁶⁾ 今後ヴェブレンの考え方の基本となる本能論まで遡り、消費論のみならず、その基本的な方法論および思想体系の解明をすることこそが、今日におけるヴェブレンの消費論の有効性を明確にするために不可欠な手順であるといえよう。

注

- (1) ヴェブレンや制度派経済学に関しては非常に多くの研究があるが、例えば、オーサーはヴェブレンがコモنز、ミッチェルらと共に制度学者の創設者の一人ある、と次のように述べている。「制度主義学派は経済思想に対する顕著なアメリカの貢献である。それは1900年ごろに始まった。……この学派の3人の偉大な人物はヴェブレン、ミッチェルおよびコモنزである」(Jacob Oser/William C. Blanchfield, *The Evolution of Economic Thought* Third Edition, New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 1975, p.360.)
- (2) conspicuous consumptionは「ヴェブレニアン・フレンジオロジー」いわゆるヴェブレンの造語の一つとして知られている。本稿ではわが国におけるヴェブレンや制度学派ならびにアメリカ経済思想における偉大な先駆的研究者である小原敬士の「衒示的消費」という訳語を使っている。この用語は、「誇示的消費」あるいは「みせびらかしの消費」とも呼ばれている。ところが『有閑階級の理論』の最近の邦訳では「顕示的消費」という訳語をあてている。その解説の中で訳者の高は「本書は、顕示的閑暇や顕示的消費（従来は「衒示的消費」とか誇示的消費と訳された）」と述べているが、なぜ「顕示的閑暇」あるいは「顕示的消費」という用語を使用したかについては何ら解説されていない（著者ソースティン・ヴェブレン 訳者高哲男『有閑階級の理論』筑摩書房、ちくま学芸文庫、1999年3月10日第二刷発行）。もちろん“conspicuous consumption”は「顕著な消費」ではない。それは『有閑階級の理論』のなかでヴェブレンが明確に規定している内容を理解していない、といえよう。ヴェブレンのいう「衒示的消費」とは非生産的な有閑階級に属する人々が自らの資力を見せびらかすために主体的・意識的におこなう行動であり、制度的にきめられた一定の基準を満たすべく行なわれる消費のことである。したがって単なる「顕著な消費」ではない。もちろん“conspicuous consumption”を「顕著な消費」と訳出した邦訳書もかつてはあった。例えば、大野信三による「顕著な閑暇」「顕著な消費」(ソーシタイン・

ヴェブレン著大野信三譯『有閑階級論』第一期刊行『社会科学体系』11、而立社、大正13年5月15日発行)や陸井三郎の「顕著な閑暇」「顕著な消費」(陸井三郎訳『有閑階級論 平和の条件』河出書房、世界大思想全集17 社会・宗教・科学思想篇、昭和31年5月15日初版発行)などを参照されたい。

- (3) Milton Lower, “The Evolution of the Institutional Theory of Consumption”. in *Institutional Economics Contributions to the Development of Holistic Economics, Essays in Honor of Allan G. Gruchy* (Boston: Martinus Nijhoff Publishing), 1980, p.82.
- (4) Wilfred Dolfsma, “Life and Times of The Veblen Effect”, *History of Economic Ideas*, VIII. 2000. 3, p.61.
- (5) Robert L. Basmann, David J. Molina, and Daniel J. Slottje, “A Note on Measuring Veblen’s Theory of Conspicuous Consumption”, *Review of Economics and Statistics* 70 No3. (August 1988), p.531.
- (6) Stephen Edgell, “Veblen’s Theory of Conspicuous Consumption after 100 years”, *History of Economic Ideas*, 1993 March, VII, pp.99-125. この論文は1996年の5月30日から6月1日にかけてミネソタのカールトンカレッジで行なわれた第二回国際ソースティン・ヴェブレン協会の会議で発表した論文の改訂版である。
- (7) 『有閑階級の理論－制度の進化についての経済学的研究』は1899年2月にヴェブレンの処女作として刊行された。本書は14の章から構成されているが、7章ごとに2つの部分に分かれており、特に第一章の緒論は、理論的前提をなしている、といえる。(ジョセフ・ドーフマン著八木甫訳『ヴェブレン：その人と時代』ホルト・サウンダース・ジャパン、1985年9月30日第一刷発行、250-252頁)。またヴェブレンにおいては「閑暇」(leisure)という言葉は、時間と労力の非生産的消費あるいは衒示的な消費あるいは浪費を意味する。ソースティン・ヴェブレン著、小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、昭和36年5月25日第一刷発行、

解説、383頁。

- (8) ヴェブレンの影響力は思わぬところまで及んでいる。たとえば、エリック・ロールは「今日彼の思想の影響力は広く承認され、その影響は広く認められているのであって、時としてはもっとも思いがけない部分にさえ及んでいる」と述べている。(Erich Roll, *A History of Economic Thought*, Faber & Faber Limited, p.441. エリック・ロール著、隅谷三喜男訳『経済学説史 下巻』有斐閣、昭和45年6月10日初版第三刷発行248頁)。

- (9) Stephen Edgell, *op. cit.* p.100. ヴェブレンは1895年の秋頃から『有閑階級の理論』の執筆に取り掛かり、4年後の1899年の2月に出版した。(小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、解説374頁)。

ヴェブレンは「社会主義理論における若干の閑却された点」の中でスペンサーの社会主義論を手がかりとして「経済的な見栄」(economic emulation)の概念を中心とする独特の社会主義観を述べた。(小原敬士著『ヴェブレン』勁草書房〔思想学説全書12〕、1974年6月25日第1版第1刷第2回発行、32頁)。この点についてはDavid Seckler, *Thorstein Veblen and the Institutionalists A Study in the Social Philosophy of Economics* (London: Macmillan Press Ltd, 1975), pp.37-42. も併せて参照されたい。この中でセックラーは、ヴェブレンが科学的な概念として「見栄」(emulation)を発見し、それは社会科学に対する彼の最大の貢献の一つである、とすら述べている。また三部作の論文とは「製作本能と労働の嫌忌すべき性質」(The Instinct of Workmanship and The Irksomeness of Labor, *The American Journal of Sociology*, Vol.IV, September, 1898)「所有権の起源」(The Beginnings of Ownership, *The American Journal of Sociology*, Vol.IV, November, 1898)および「野蛮時代の女性の身分」(The Barbarian Status of Woman, *The American Journal of Sociology*, Vol.IV, January, 1899)を指す。これらの論文は、その後次の論文集中に再録されている。Thorstein Veblen, ed by Leon Ardzrooni, *Essays in Our Changing Order* (New York: Augustus

M.Kelly, Bookseller, 1964)

- (10) Stephen Edgell, *Ibid.*, pp.100-101. David Hamilton, "Institutional Economics and Consumption", *Journal of Economic Issues*, 1987, 21, p.1539.

- (11) ヴェブレンの本能制度論については、例えば、小原敬士著『ヴェブレンの社会経済思想』、一ツ橋大学経済研究叢書18、岩波書店、昭和41年3月25日第一刷発行、第三章「基本観念と歴史哲学」(61～77頁)および中山大著『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房、1974年5月20日第一刷発行、82～116ページなどを参照されたい。

- (12) Stephen Edgell, *op. cit.*, pp.101-102.

- (13) ここでヴェブレンとの関係というのは、John Rae, *Statement of Some Principles on the Subject of Political Economy: Exposing the Fallacies of the System of Free Trade, and of Some Other Doctrines Maintained in the "Wealth of Nations."* 1834. において展開されている考え方との関連性である。また、ヴェブレンとレーとの関連については、たとえば、次の論文を参照されたい。Blake Alcott, "Conspicuous Consumption: A Neglected Intellectual Relationship" *History of Political Economy* 23:4.1991, pp.731-744. および Stephen Edgell and Rick Tilman, "John Rae and Thorstein Veblen" *Journal of Economic Issues*, Vol.XXXVIII, No3, September 2004, pp.765-786. ドーフマンによれば、ヴェブレンはJ. M. クラークの同僚の家でのパーティでレーの研究をよく知っているかどうか尋ねられた時に「知っている」と答えた後で、「彼のアイディアを私が盗んだと非難する人もいる」と付け加えた、という。(Joseph Dorfman, *Essays, Reviews and Reports*, [New York: Clifton, N.J.] 1973, p.31.). またレーの消費論についてはメイソンの研究もある。「ジョン・レーの奢侈的消費論」ロジャー・メイソン著、鈴木信雄、高 哲男、橋本努訳『顕示的消費の経済学』名古屋大学出版会、27～44頁。(The Economics of Conspicuous Consumption [Edward Elgar Publishing Ltd, 1998]).

- (14) このポアスとヴェブレンの関係であるが、ヴェブレンはシカゴ大学において多くの学問的刺激を

受けた。そこには、当時さまざまな学問分野において新しい考え方を持った優れた学者が多く集まっていた。たとえばジャック・レーブ(Jacques Loeb)、ウィリアム・コードウェル(William Caldwell)、ジョン・デューイ(John Dewey)などと共に、ボアスもあり、ヴェブレンは彼らから多くを学んだ。

特にボアスからはクワキントルインディアンの研究を学んだ。同時に当時のシカゴはアメリカの多くの社会的・経済的問題が起こっており、これらの外的な環境もヴェブレンの思想形成に少なからぬ影響を与えた、といえよう。(この点については、小原敬士著、前掲書、31~40頁を参照されたい)。また、ボアスはクワキントルインディアンについての民俗学的研究の中で、財産の機能を衒示的消費の法則として説明していた。インディアンたちが高い地位を獲得したり、財産を分配する方法は、ポトラッチに基づいている。インディアンはポトラッチを用いて競争相手を凌ぐために財産を獲得しようと努力する、と述べている。(詳しくは、ドーフマン著、八木甫訳『ヴェブレン《その人と時代》』、168から170頁を参照されたい)。

(15) Stephen Edgell, *op. cit.*, p.102.

(16) *Ibid.*, pp.102-104. ここでエジェルの述べているのはヴェブレンの方法論を貫く二分法である。ヴェブレンは、その経済分析において「親性本能」「取得本能」「製作本能」および「好奇本能」という4つの本能だけを使った。これら4つの本能の特徴を要約すると次のようになる。「親性本能」とは自分自身よりも他人のことを配慮するように個人を導くものであり、公共財への親のような配慮を導く。これとは反対に他人の福祉よりも個人の個人的な福祉への配慮を導くのが「利己的本能」あるいは「取得本能」と呼ばれるものである。「製作本能」とは効率的で経済的な仕組みなどに関心を持たせる本能であり、ヴェブレンはこれを重要視したが、この本能はむしろ補助的な本能である。それは、この本能の位置づけがいささか特殊であり、具体的な目的は他の本能によって与えられる。たとえば、資源の経済的利用と社会の福祉とを結びつけるには「親性本能」の補助が必要だからで

ある。「好奇本能」とは実践的な知識を導く、たとえば、工業技術的な手段への関心などである。特にこの本能はイノベーションを導くものとしてヴェブレンの科学的な思想において重要な位置を占めている。文化的複合体における硬直的な制度への変化をもたらすのが、イノベーションだからである。またヴェブレンの本能分析は経済的不調和理論の基礎を与えているといえる。彼は人間の生物学的構造における根本的な矛盾を暴露している。それは親性本能と利己的本能あるいは取得の本能との間に存在する。これら二つの本能は相互に排他的な目的に導くと考えられた。ヴェブレンの分析においては、経済体制内の矛盾は、親性本能と取得本能と間に存在する心理学的対立に単に文化的な表現を与えているのに過ぎないと見做された。この点については、グルーチャーの所説を参照されたい。(Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: An American Contribution* [New York: Augustus M. Kelly-Publishers, 1967], pp.58-68)

(17) Stephen Edgell, *op. cit.*, p.103.

(18) *Ibid.*, p.104.

(19) *Ibid.*, p.105. ここでエジェルのミルズについて論述は次の書物を参照されたい。(The Sociological Imagination (Oxford University Press, 1959). 『社会学的創造力』紀伊國屋書店、1975年6月30日第8刷発行)。

(20) ライベンシュタインの所説については、次の論文を参照されたい。H. Leibenstein, "Bandwagon, Snob, and Veblen Effects in The Theory of Consumer Demand", *Quarterly Journal of Economics*, 64 (May 1950) pp.183-207. および田中 洋、清水聰編著『消費者・コミュニケーション戦略』〔現代のマーケティング戦略④〕有斐閣、2006年5月10日初版第1刷発行、65頁を参照されたい。

(21) Stephen Edgell, *op. cit.*, pp.105-106. テイルマンはヴェブレンとアドルノについて、次のように述べている。「アドルノは、ヴェブレンは衒示的消費が好きではなかった、と述べている。というのも、それが真の欲求の充足を目指すからではなく、社会的な尊敬や地位を目指すからである。アドルノは確かに衒示的消費が存在することを認め

- ていたが、彼の分析はヴェブレンの分析とは根本的に異なっていた。ヴェブレンが衒示的消費を（アドルノ言葉では）『単なる見せびらかし』と見たのに対して、アドルノは工業生活の苦役を凌ぐために必要である、と見た。」(Rick Tilman, *Thorstein Veblen and His Critics, 1891-1963* [New Jersey : Princeton University Press, 1992], p.193.)
- (22) Stephen Edgell, *Ibid.*, p.106.
- (23) *Ibid.*, p.107. しかし、ティルマンは衒示的消費に関するキャンベルの考え方に異議を唱えている。詳細に関しては、次の論文を参照されたい。Rick Tilman, Colin Campbell on Thorstein Veblen on Conspicuous Consumption, *Journal of Economic Issues*, Vol.XI, No1. March 2006, pp.97-112.
- (24) *Ibid.*, pp.107-108.
- (25) *Ibid.*, p.108.
- (26) *Ibid.*, pp.109-110.
- (27) *Ibid.*, p.110.
- (28) *Ibid.*, pp.110-111. マートンの所説については、ロバート・K・マートン著、森 東吾、森 好夫、金沢 実、中島竜太郎共訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1978年12月5日第13刷発行、特に第一章「顕示的機能と潜在的機能」を参照されたい。
- (29) *Ibid.*, pp.111-112.
- (30) *Ibid.*, p.112.
- (31) *Ibid.*, p.112.
- (32) *Ibid.*, pp.112-113.
- (33) *Ibid.*, p.113. エジェルによれば、マンスフィールドおよびマクドナルドは建築における衒示的消費について述べている。
- (34) *Ibid.*, pp.114-115.
- (35) *Ibid.*, pp.115-116.
- (36) Harold Wolozin, Thorstein Veblen and Human Emotions: An Unfulfilled Prescience, *Journal of Economic Issues*, Vol. XXXIX. No.3 September 2005, pp. 727-740.